

第2章 将来人口と都市構造・土地利用の方向

1 将来人口

平成27年（2015年）における将来人口の基本値を約15万6千人とする。さらに、東京直結鉄道整備を前提にした人口動向に及ぼす影響（アナウンス効果）を、別枠で3千人から9千人とする。

2 都市構造・土地利用の方向

1) 都市構造を支える交通ネットワークの形成

都市間競争に打ち勝てるようなまちとしての利便性を向上させ、住みやすさ、生活環境としてのまちの魅力づくりを行うため、広域や市内の移動に便利で、まとまりのある都市構造の実現に向けて、都市構造を支える交通ネットワークの形成を推進する。

道路については、既存の架橋整備を含めた都市間道路ネットワークの形成を推進する。また、通過交通の市街地への流入を抑制し、鉄道に沿って分布している市街地の交通の流れを円滑にするため、外郭環状構造の確立に努めるとともに、都市計画道路等幹線道路を梯子状に整備する。日常生活に身近な移動空間としては、歩道やサイクリング道路の整備を進め、通学路の安全を確保し、高齢者や障害者を含めて誰もが安心して便利で快適に移動できる都市空間の整備を推進する。また、環境にも配慮した道路整備を推進するとともに自転車を活用する等野田市の個性づくりに努める。

公共交通機関については、東京直結鉄道、東武野田線の複線化等を促進するとともに、駅への交通ネットワークや駅前広場等、鉄道を活かすための条件整備を推進する。また、バス交通の一層の利便性の向上を図る。

2) 自然や歴史と調和したコンパクトな市街地の形成及び緑地等の保全

既存の都市構造を活かし、野田市の豊かな自然環境や歴史資源と調和したコンパクトな市街地を形成する。長期持続的成長可能なまちの活力を創出し、結果として若い世代が集い、バランスの良い世代構成となるようなまちづくりを行うとともに、高齢者や障害者を含めて誰もが便利で快適に暮らせるよう、住商工の適正配置を促進し、生活環境を備えたまとまりのある市街地整備を推進するため、市街地ゾーンを設定する。

また、利根川、江戸川、利根運河により周囲を河川に囲まれている野田市の特性や公園・緑地を活かし、市民が豊かでうるおいのある余暇を過ごすことができるよう、快適な環境整備を推進するため、緑地・レクリエーションゾーンを設定する。

市街化調整区域を中心に分布する優良農地について、農業振興の拠点及び都市内の緑地環境として維持保全するため、農業振興ゾーンを設定する。

3) 4つの核の形成

東京直結鉄道の延伸とあわせて野田市駅・愛宕駅周辺を広域的な性格を持った拠点として整備する。また、梅郷駅周辺、川間駅周辺及び関宿中央ターミナル・関宿支所周辺に存在する都市機能集積の活用等によって、それぞれの地域サービス核を形成する。

中心サービス核…野田市駅・愛宕駅周辺地域

地域サービス核…梅郷駅周辺地域

…川間駅周辺地域

…関宿中央ターミナル・関宿支所周辺地域